

スリッパ : 小原元さんのおもい出

渡辺, 春輔

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

126

(終了ページ / End Page)

128

(発行年 / Year)

1980-02-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019287>

なったときに、時の学部長が小原さんの名を挙げると、元さんは即座に「ぼくは補導される側ですから」という不朽の名言を吐いた。上から見下ろすのは元さんの性に合っていなかった。

人生における使命などという立場からは、元さんの生き方にいろいろの批評も注文もあろう。だが、一つの人生は所詮一つの人生なのだ。あれこれ批評や注文に合わせて姿形を整える訳にはいかない。ぼくは、元さんが胸を張らず、しかも胸を張れない弱さをも自覚していて、いかにも元さんらしい嘘いつわりのない雰囲気醸し出しながら、人との付き合いを何よりも大切にしていてその生きざまを肯定する。元さんは、あいなるべくは他人を傷つけず、他人を傷つけない範囲で信念をもって誠実に進歩的にその人生を生きたいと願っていたのだ。

計報に接してから一年余り、ぼくは外で飲む習慣をほとんど失ってしまった。上野駅構内の私たちの古戦場のごときは、ついぞ絶えてのぞいてみたことさえない。(一九七六・五・三〇)

(法政大学文学部教授)

スリッパ

——小原元さんのおもい出

渡辺春輔

小原元さんとはじめてお目にかかったのは、終戦の翌一九四六年二月のことで、日本評論社は当時、成城の社長の家を事務所にして細々と営業をしていた、そこまでわざわざ近藤忠義先生のお使いで原稿を届けてくださったのである。

ぼくが玄関にお迎えすると、まだ学生だった小原さんがにこやかに立っておられた。そして、そこにぬぎすてられていたスリッパをはいて、編集室にはいつてこられた。

その何でもないことが、ぼくににとっては大変なことだったのだ。年のおしつまった社長の家の寒さはきびしかった。火はない。ボロ靴下を二枚重ねているが、廊下の冷えがこたえた。そんなとき、玄関をはいろうとすると、スリッパがおいてあった。これを履けば、ずいぶん足がたすかるだろうとおもった。履こうか、と誘惑されたがやめた。やめてよかった。それを履いたのは営業のKである。

事務所は広間に、編集・営業・経理がいっしょだった。ぼくは、

Kのやつうまくやったな、とおもっていたとき、社長が血相をかえてはいってきた。

「おれのスリッパ履いたやつは誰だ！」

Kは真蒼になって、ぬいだスリッパをささげて社長のところへもっていった。

「スリッパ履きたけりゃ、自分でもってこい、ばかやろう」

社長はそういつてひったくると、きたないものをはらうように柱にたたいたスリッパを乱暴に履くと、あとも見ずに出ていった。

部屋のなかは寂として声もない。Kは悄然として、算盤をはじいていた。

——年を越したが、数ヶ月まえ、そんなことがあったのである。

小原さんがそのスリッパを履いたのである。社長も、他人につかわれるのがいやなら、そんなところへぬがなければいいのに、とぼくはうらめしかった。

小原さんの用はすぐすんだ。が、はなしをつづけたいらしかったのを、ぼくは生返事しながら、失礼を承知で追いたてることにした。駅まで送って、道々話をしようとおもった。とにかく、社長がいつ帰ってくるかわからない。小原さんに罵声をあびせるようなことになったら、近藤先生にも申しわけないとおもった。

その心配が適中した。玄関を入れてくる社長とぼったり会った。ぼくはあわてて、

「社長です」

といつて、紹介しようとするのを、小原さんは一歩前に出て、

「社長ですか、小原です」

と挨拶した。その豪放磊落な声は、あきらかに社長を圧倒した。

社長も、編集者のところへ来ている客を見境いなくとなるわけにはいかなかったろうし。

「鈴木です」

かれはうらめしそうに小原さんの足もとをながめながら返礼した。

駅から帰ってくると、社長は待ちかまえたように、

「あれはどなただ」

ときいた。ぼくは、名刺がないので、とメモ用紙に書いてくださったのをひらいて、ただしく名前をたしかめながら、

「小原元さんです。近藤先生のお弟子さんで、有望な国文学者です」

とはったりをきかせた(失礼ない方だが)。社長もさすが大人だった。

「そう、そういう人はいまのうち、親しくしておくのがいいよ」

といつて、こんどはたのしむように、のち有名になったある学者の若いときにした交際をおもい出しながらはなした。

ぼくは神妙に直立の姿勢でできた。こういうのをツバをつけておく、と編集者がいうのをおもい出していた。社長のスリッパをながめながら。

小原さんの業績を一冊にする話は、その後出ないではなかったが、戦後の混乱にまぎれ、社そのものも斜陽の浮目で実現しなかった。

それから十数年にわたって、何回も小原さんと逢うことになったが、そのたびに、栄進されて、ついに教授になられるのだが、ぼくはどうも、初対面の印象があざやかで、学生の小原さんのイメージが消えないで困った。

小原さんも、ぼくを見ると「いやなオヤジだ」とおもわれたにちがいない。学生のとぎのまま応答されるのがつねだった。

疎遠になったぼくにも、小原さんの学界で、国際的にもはなばなしく活躍されているのはきこえていた。その、これからというとき、なくなられた。十歳ぐらい年上のぼくなどがまだ生きているのに、というおもいがしきりである。小原さんも、心のこりであられたろう。

豪傑笑いをされる小原さんの声が今でもこびりついている。

小原先生の想い出

——酒と旅と「江戸ッ子」

山田道弘

日文科の研究室をかりて近代文学研究会が発足したのは一九五三年の春だったと思う。当時助手だった小原先生にご指導をお願いして、二年生十人程で始めたこの研究会は卒業まで続いた。この研究会を通じて先生と学生たちとの関係は急速に親密になっていったが、とくに私たち仲間には遠慮がなかったようだ。

ある時、先生が「君たち私用電話、少し控え目にしてくれませんか」と、先生独特の小さく息を呼吸しながら、その時咽の奥を鳴らすような笑い声を立て、済なそうにテレたような顔でいわれた。学生のタマリ場となっていた研究室の電話は、朝から晩まで学生たちの話し声で絶え間がなかった。通話料は相当なものだったろう。学校側から幾度か管理責任者の先生のもとへ苦情が持ち込まれていた。結局一年程後に取りはずされてしまったが、先生の困惑をよそに学生たちは、この無料で便利な電話を愛用し続けた。先生のこうした態度は一貫していたように思うが、かえって学生たちの方が無遠慮で、今思えば生意気で身勝手だった。